

団体スポーツにおける個人を活かすチーム・マネジメント  
—C 大学女子ソフトボール部の実践例—

**Team management that utilize the individual in organized sport :  
Practical example of C university softball team**

二瓶雄樹<sup>\*</sup> 桑原康平<sup>\*</sup>

<sup>\*</sup>中京大学

**Abstract**

The purpose of the present study is the following two. Verify it with the effect of "Team management that utilize the individual". And, Present the coaching process where "Individual as existence that plays the role" in group sports is clarified.

The following effects were achieved from "Team management that made the best use of the individual".

1. Effective use for time and environment
2. Game power improvement of the player who gave role
3. Effective, efficient preparation before it plays a game
4. Improvement of management power of team

The following results were obtained about the coaching process where "Individual as existence that played the role" was clarified.

1st stage: Making and well-known of "Team vision"

2nd stage: Making and well-known of "Team vision" and "Definition of team" based on game characteristic.

3rd stage: Presentation of "Individual role" that considers individual game power.

"Individual as existence that plays the role" can be clarified through these stages.

In the softball team that had become an object in the present study, the problem was canceled by passing this coaching process. And, practicing positive effect was achieved. It is hoped that this process will be invoked to a variety of group sports in the future.

## I. 研究の背景

2010年、高校野球を題材にした岩崎の「もしも高校野球のマネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」<sup>2)</sup>、通称「もしドラ」が推定販売部数100万部を超え、大きな社会的注目を集めた。この「もしドラ」は公立高校の弱小野球部のマネージャーがピーター・F・ドラッカーの「マネジメント」<sup>7)</sup>を読み、チームを全国大会に導くというストーリーで、ビジネス書である「マネジメント」の方法を高校の部活動に取り入れるという構図が多く読者を引きつけ、アニメ化や映画化がされるまでになった小説である。その小説の中では、主人公を中心にピーター・F・ドラッカーの「マネジメント」<sup>7)</sup>の言葉を理解し、個人が役割を担い、それを全うし成長していく高校球児たちの様子が伺える。その考えの中心には個人の役割を明確にした「チーム・マネジメント」の発想があり、「役割を担う存在としての個人」が表現されている。

ベースボール型スポーツにおける「チーム・マネジメント」は、我が国では1980年前後に現れ、特に野球において実践されてきたと考えられる。1978年、北森のプロ野球を題材にした「巨人軍研究～勝つための組織作り」<sup>3)</sup>では読売ジャイアンツ(巨人軍)が達成したセントラル・リーグ9連覇(通称V9)を背景にその「チーム・マネジメント」の実際を捉えている。その中で、コーチのコメントとして以下のように綴られている。「かつてプロ野球は、監督が一人で何から何までやることになっていた。会社でいえば中小企業だった。それを大会社のような社長―各部門担当管理職のシステムにしたのは、ほかならぬ川上さんだった。」<sup>3)</sup>そしてそれは、「三十六年の第一回ペロビーチ・キャンプから持ちかえったもので、大リーグのシステムを導入し、コーチを中間管理職としてその存在を明確にし、監督がそれを強力にバックアップして機能させるようにしたことなど、チームの管理体制を整えることに成功したことである。」<sup>3)</sup>。読売ジャイアンツの当時の監督、川上哲治氏がチームを強化する方法として、アメリカ大リーグのシステムを逸早く輸入したことが伺える。現在プロ野球界では、選手をサポート、指導する多種多様な専門的コーチが存在し、またスコアラーやスカウトといったチーム全体を裏から支える部門の重要性も知られている。今では当たり前の体制も、当時は「担当管理職という発想」<sup>3)</sup>として捉えられ、大変斬新な米国式のアイディアであり、それは「中小企業が大会社になったようだ」<sup>3)</sup>と例えられるほどであったのである。

また近年では、選手自身の専門的能力に対する評価も向上しているように伺える。1983年～2003年まで読売ジャイアンツで活躍した川合昌弘氏は通算533本の犠牲バント世界最多記録を持っている。犠牲バントとはランナーがいる場面で、バットスイングをするのではなく、投手に平行に構えたバットにボールを当て、マウンドの前方付近に転がし、ランナーを確実に進塁させる方法である。川合は、この「犠牲バントの正確さ」という専門的能力(「バント職人」とも例えられた)をかわれ、2004年に中日ドラゴンズに移籍、その後二年間選手として活躍した。当時の監督、落合氏も「一芸に秀でた者を使う」と述べ、川合を多用した(実際には守備要員としても起用していた)。また2005年、阪神タイガースのセントラル・リーグ優勝を果たしたのは、「JFK」と呼ばれた、投手の継投戦略が一因である。この「JFK」は、選手の頭文字を意味しており、J―ジェフ・ウィリアムズ、F―藤川球児、K―久保田智之でそれぞれ1イニングずつを投げ切ることを役割としていた。通常、先発投手は一度先発すると、4日～6日の登板間隔をあげシーズンを通して、20～30試合に登板するのが通常であるが、彼ら中継ぎ、抑え投手は毎試合準備し、このシーズンは3人ともに70試合前後の登板試合数をほこった。1イニングに専念して3アウトをとることと、毎試合投げても維持できる専門的能力の高さは高く評価され、そして結果へと繋がった。

このように、1980年代前後に、個人の専門性を活かしたチーム運営が行われ、それは指導的な立場、チームを支える立場、また所属している選手自身にまで反映され、大きな効果を果たしてきた。

一方、我が国の学校運動部における個人の存在はその性格が異なる。江刺らの「高校野球の社会学」<sup>1)</sup>では、「個人を犠牲にしても集団に貢献することを社会的徳目としてきた考え方は東洋的であり、それはとくに日本において強い」<sup>2)</sup>と述べ、「ものいわぬ羊」づくりの管理教育<sup>3)</sup>と個人の存在を表現している。また大橋らは、学校運動部では勝利志向が強く、没個人、精神主義を促すことを指摘し、「代表となり大会へ出場するなど、誰もが一様に勝利志向、没個人、精神主義となる。」<sup>4)</sup>と述べ、個人の個性が排除され、集団のために尽くす精神主義を指摘している。上杉は日本人のスポーツに対する価値意識を“苦しみの中のスポーツ価値意識”として表現し、精神主義、自虐主義、修養主義、全力主義の4つの側面から説明、その中で「個人の創意・工夫よりも規範どおりの鍛錬の中で努力・忍耐することから身体がただされ・・・」<sup>5)</sup>と個の意識は排除される前提として存在していると表現している。このように、学校部活動においては個人の存在が、犠牲を伴って集団のために尽くさなければならない存在と認識されている。それは、ネガティブな意味で集団主義、または没個人という言葉で表現されてきたのである。本研究では、この“集団において個人は犠牲を伴う存在として認識されている精神性”を「犠牲となる個人」と表現する。

## II. 問題提起

今回研究の対象となる、C大学女子ソフトボール部でも選手個人の存在は、「犠牲となる個人」として捉えられることが多々あり、その影響で選手と監督間に軋轢を生じさせていた。それは、「犠牲となる個人」と認識される当事者のストレスのみならず、そのまわりの選手の「形式的で過剰な平等精神」という形でも表出したのである。例えば、選手が試合中、競技能力の低さによって補助的な役割になった(この段階では「犠牲となる個人」)場合、当事者の失望感を周りの選手がくみ取り、同じように練習し努力してきたという平等的思考から、その“決断を下した指導者に対して不平不満を感じる”こと等を指している。指導者としては、チームの目標上(全国大会優勝)、全員の選手に同じ立場と同じチャンスを与えることはできず、選手を選択する必要性があり、また一部の選手の練習を制限する必要があった。そして、この事態にやり場のないストレスを感じていた。

上記のような問題を今回対象となる、C大学女子ソフトボール部では表出させていた。指導者としてはチーム目標に応える形で下した決断も、練習や試合で制限を受ける選手にとっては受け入れることが難しい事実として捉えられ、またそれを見ていた周りの選手は「形式的で過剰な平等精神」を表し、互いにストレスを生じさせていたのである。これを受け、同部では2010年秋より、個人を活かすチーム・マネジメントの発想からさまざまな取り組みを行っている。

## III. 目的と本研究の構成

以上のことから本研究は、第一にC大学女子ソフトボール部で2010年秋から行われた「個人を活かすチーム・マネジメント」の取り組みとその効果を検証することを目的とする。実際の取り組みは三段階に分かれている。本研究では、選手をある目的のもとに導くプロセスを「コーチング・プロセス」として表記する。そして、その結果から「役割を担う存在としての個人」を明確にするコーチング・プロセスを明らかにし、団

体スポーツにおける個人を活かしたチーム・マネジメントを提示する。これを第二の目的とする。

今回対象となる大学女子ソフトボール部は、創部 40 年以上続く伝統校で、30 名程度の人数で構成され、また全国大会に長年連続出場しているレベルのチームである。

#### IV. 実例の提示

前記したように、本研究の目的の一つであるC大学女子ソフトボール部で 2010 年秋から行われた「個人を活かすチーム・マネジメント」の取り組みとその効果を検証するため、実際に行われた取り組みを段階順に説明する。このコーチング・プロセスは「チーム・ビジョン」、「チームの定義」、「個人の役割」の三段階であり、それぞれの具体的内容も加えて解説する。

##### 1. チーム・ビジョンについて

下記に示すビジョンは 2010 年 9 月、新チーム発足時に監督、キャプテン、副キャプテンの三人で考案された。「目標」を中心として「個人、チームの姿勢」「内的、外的な取り組み方」の視点からお互い意見を出し合い、内容を選別し考案した。またその文章を基に、イメージ(図 1)も作成した。

「インカレ優勝を大きな目標とし、各大会では課題の克服につとめ勝利を目指す。その目標実現のために、一日一日を大切にし一人一人が課題と向き合い、妥協せず、真摯にソフトボールに打ち込み、個人的役割を責任を持って完行する。また、C 大学体育会ソフトボール部員という自覚を持ち、周囲の人に対する感謝の気持ちを忘れないことで、自然に応援され、憧れを抱かれるチームを作る。」

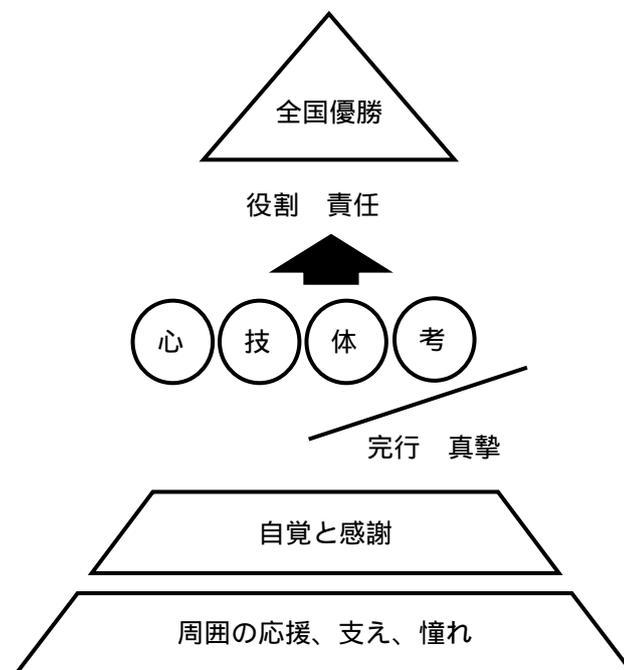


図 1. C 大学女子ソフトボール部ビジョンのイメージ

具体的、外発的な目標は全日本大学選手権での優勝である。その他の大会では、個人、チームとして課せられた課題を克服することを第一とし、その上で勝利を目指すことを求めている。目標実現のため、時間を無駄にせず、日々、個人の課題を持ってソフトボールに打ち込む。またそれぞれ与えられる個人的な役割を責任を持ってやりきることを求めている。C 大学体育会ソフトボール部員という自覚を持って、責任ある行動を日頃から気を付ける。周囲の人(家族、大学、部長、監督、コーチ、管理栄養士)に感謝することは、練習、時間を無駄にできないことでもあり、またその気持ちは、周囲に伝わり自然と応援されるチームになる。また対外的には、高校、中学校との合同練習会及び指導学生の派遣、近隣大会での手伝い、学内交通安全活動への出席などを行い、学内外の人が応援したくなる、また中高生、その保護者が憧れを抱くチームを作ることを目指す。

以上がC大学女子ソフトボール部の「チーム・ビジョン」とその説明であり、機会があるごとに提示され、このビジョンに即した言動を求めた。

## 2. チームの定義について

次に個人の役割を明確にし、組織化するために、チームを定義する必要がある。この「チームの定義」は「チーム・ビジョン」に即し、またソフトボールという競技特性を把握した上で、監督によって作成された。以下には、C大学女子ソフトボール部におけるチームの定義とそのイメージ(図 2)を示す。これも、2010年9月新チーム発足時に選手全員に説明され、新入生に対しては2011年3月に解説された。

「個人が自分の役割を果たし、互いに補完し合い、目標達成のために努力する集団。」

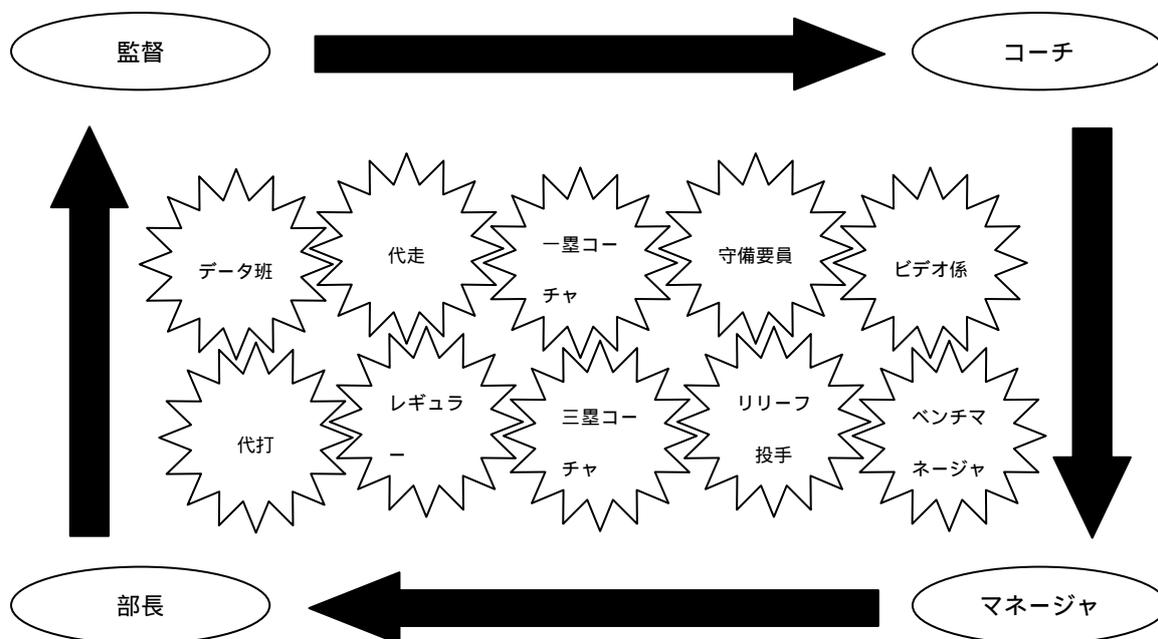


図 2. チームの定義イメージ

個人が一人一人役割を担って、足りない部分を補いながら、目標達成のために努力する、その集団をチームとして定義している。またイメージ図では、チームでの選手個人の役割を歯車として表現している。レギュラー、代打、代走、守備要員、リリーフ投手、一塁コーチ、三塁コーチ、データ班、ビデオ係、ベンチ・マネージャと10種類の役割を設定している。その周りを、部長、監督、コーチ、マネージャが囲んでいる。

チーム目標は「チーム・ビジョン」でもあったように、全国大会優勝と設定している。このチーム目標のために、足りない部分を補完しあう個人が存在する。レギュラーはレギュラーとして、データ班はデータ班として、選手それぞれが責任を持って果たさなければならない。チーム目標は最も高い位置に設定しているため、ソフトボールの技量の優劣によって役割は規定される。しかし、その優劣は部員としての優劣ではないことも強調しなければならない。例えば「レギュラーが偉くて、レギュラーでない者は偉くない」などの発想ではない。個人の役割に違いはあれ、チーム目標のために一人一人が努力する。その意味からも、それぞれが歯車であり、全てが上手く噛み合わなければならないことをイメージとして図を作成している。

以上が「チームの定義」とその説明であり、「チーム・ビジョン」と同様に、機会があるごとに提示され、責任を持って役割を果たすことを求めた。

### 3. 個人の役割について

「チーム・ビジョン」と「チームの定義」のプロセスを経て、「個人の役割」を規定する。表1はポジション別で、試合での役割を記載した一例である(2011年春リーグ前)。左端の○の番号は、守備位置を、Dは打撃専門の選手たちを示しており、その右揃いに個人名が記載されている。個人名は選手○(ローマ字)と表記し作戦上重要な文章は黒塗りで示している。

それぞれのポジションで平均約3名おり、その中でレギュラーを定め、その他、代打、代走、リリーフ、守備要員、一塁・三塁コーチを指定し、個人的に細かな役割まで言及している(前記したように、中には戦術に直接関わる事柄も明記している)。またそこから外れた者は、データ班、ベンチ・マネージャ、ビデオ係など補助的な役割を担うこととなる。この研究では後者の者を「制限される存在としての個人」と表現する。

### V. 実践的効果について

「個人の役割」を規定することにより、どのような効果があるのかを学生運動部、ソフトボール競技であることを加えながら、実践的効果について述べる。この「個人の役割表」はチーム目標の舞台である全国大会とそれに関係する大会前、一ヶ月～三週間前に提示された。具体的には、全日本大学選手権の出場権をかけた春のリーグ戦と実際の全日本大学選手権の前ということになる。選手の起用方法の面では、それ以前から、ある程度役割を担った練習、また試合での起用、采配が振るわれているが、具体的に効果を発揮するのは「個人の役割表」提示後からである。まず、上記の大会に向けた練習において、時間と環境の有効利用がある。練習において学生は限られた時間、環境の中で練習をしなければならない場合がほとんどである。今回対象となったC大学女子ソフトボール部の場合、練習時間は授業終了後、平均約2時間程度であり、またグラウンドは正規の大きさよりも狭い。そんな中、役割を担うことにより、全員が同様

の練習を行う必要性がなくなる。例えば、打撃練習では全員が入るのではなく、レギュラーに加えて、代打として指定されている選手が参加する。その他、守備要員の選手は守備についたり、代走の役割がある選手はランナーに入ったり、選手としての役割のない選手は練習の補助をしたりすることになる。つまり、自分の役割に沿った

<2011 春リーグ個人役割>

① 選手 A	① 選手 B	① 選手 C	① 選手 D	① 選手 E
基本的に選手 A が全試合先発。余裕が出れば、他の投手でつなく、特に他の投手は打撃投手としても役割を果たしてもらう。				
② 選手 F	② 選手 G	② 選手 H	② 選手 I	
基本的に選手 F が選手 G で守る。選手 F はランナー3 塁時のエンドラン、転がしがある。一年生は代打に備え打撃練習に入る。練習では、投手のピッチング時の球を捕ることを第一とする。				
③ 選手 J	③ 選手 K	③ 選手 L		
基本的に選手 J で守る。試合状況で選手 L (特にバント処理時) にかえる。選手 K は代走として使うので、練習でも積極的に走者をやる。				
④ 選手 M	④ 選手 N	④ 選手 O	④ 選手 P	
基本的に選手 M で守る。選手 M はショートを守る場合もある。その他 3 人も守備の機会があり得る。また、選手 N、選手 O は代走として使うので、練習でも積極的に走者をやる。選手 O は小柄をかき回せるように、またしっかりランナーを送れるようにする。選手 P は一塁コーチャーとして役割を果たす。				
⑤ 選手 Q	⑤ 選手 R	⑤ 選手 S		
基本的に選手 Q で守る。状況によっては選手 R にかえる (代走から入ることが多い)。選手 R は代走としても使うので、練習でも積極的に走者をやる。また選手 R はランナーがいる場面で、小柄を使う場合があるのでそれにも備える。				
⑥ 選手 T	⑥ 選手 U			
基本的に選手 T で守る。				
⑦ 選手 V	⑦ 選手 W	⑦ 選手 X		
基本的に選手 V、選手 W で守る。状況によっては (左投手先発) 選手 X から入る場合もある。選手 V は外野の全てのポジションを守れるようにしておく。選手 W は 3 塁ランナー時のエンドラン、転がしがあるのでそれを練習する。また選手 V、選手 W は小柄、(バント、セーフティ、バスタ、ブッシュ) も練習しておく。選手 X は代打に備えて練習する。				
⑧ 選手 Y	⑧ 選手 Z	⑧ 選手 a		
基本的に選手 Y で守る。状況によって (選手 Y がファーストにつく時) 選手 Z、選手 a が守備につくことがある。選手 a は DP として使う。				
⑨ 選手 b	⑨ 選手 c			
基本的に選手 b で守る。選手 c は代打に備え、また代打から投手に入る場合もあるので準備しておく。				
D 選手 e	D 選手 f	選手 g	選手 h	
二人は勝負を決める場面で、代打があり得る。選手 e は三塁コーチャーとして役割を果たす。				

表 1. 個人の役割表

練習を選択して参加することができ、専門性を高めることができる。これによって、時間と環境を最大限に生かし、練習を行うことができる。それは言うまでもなく、レギュラーや特定の役割を与えられた選手の競技力向上につながり、チーム目標に繋がることにもなる。またこの効果は練習だけではなく、試合前の準備運動時にも発揮される (ここで言う準備運動は、試合に即した運動を指している。具体的にはキャッチボール、バッティング、守備練習などである。以後、準備と記載する。)。大学ソフトボールは登録メンバーを 25 人に制限している。通常、この 25 人を中心に全員が同様の準備を展開していく。しかし、役割を担った場合、全ての準備に参加する必要はなく、「個人の役割」に沿った種目に対してのみ参加することになる。そのため、試合前の大事な準備を効果的、且つ効率的に行うことができ、競技力向上に役立つのである。先にも述べたとおり、この影響の競技力向上はチーム目標に繋がる。最後に、チームの統制力の向上がある。役割を与えられるということは、責任を持つことでもある。このチームでは、「個人の役割」とそれまでのプロセスにより、役割がない選手はいない。つまり、責任を持たない選手はおらず、個人が責

任を持って役割を全うし、チーム目標のために尽力することを求められる。個人がチーム目標に貢献するために自らの必要性を感じ、チームのために自分ができることを全力で取り組めることでもある。それはチームの統制力として現れ、学生スポーツに欠かすことのできない一体感を生むのである。

## VI. コーチング・プロセスの提示

「役割を担う存在としての個人」を明確にするコーチング・プロセスを「チーム・ビジョン」、「チームの定義」、「個人の役割」の三段階で捉え提示する。なぜこの段階を経なければ「役割を担う存在としての個人」を明確にすることができないのか、「個人の役割表」が配布されるまでのコーチング・プロセス(図 3)の重要性を説明し方法論を提示する。

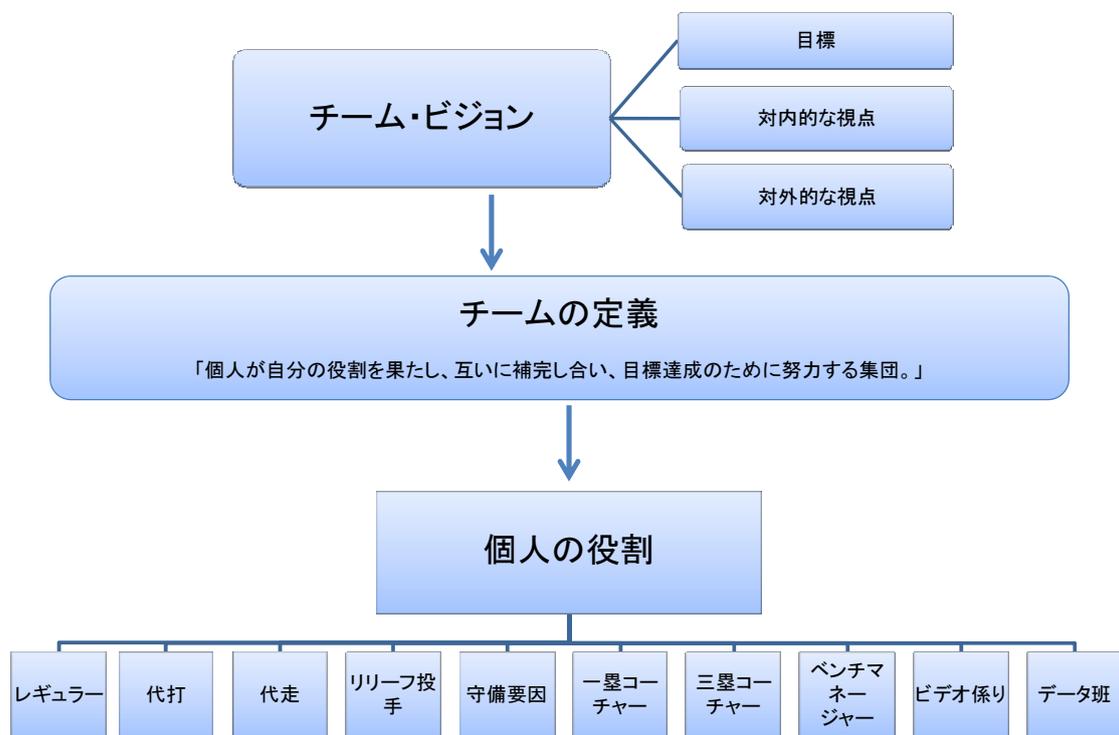


図 3. ソフトボール競技における個人の役割構築までのコーチング・プロセス

例えば、目標を明確にしていないうちで、個人の練習が急に制限されたり、チームの定義がない中で、試合中に補助的な役割に回ることは、それまで同じように練習し、時間を費やし、努力してきた選手にとって、受け入れ易いことではない(前記した問題提起での実例でもあった通り)。また、周りの選手も「犠牲となる個人」への哀れみから「形式的で過剰な平等精神」を表し、決断を下した人物との問題を表出させる。そして、チームは統制力を失っていくのである。つまり、「制限される存在としての個人」が「チームにおける自らの必要性を見いだせない」ことと、その周りの選手が抱く「チームのために「犠牲となる個人」が存在する」ことに、問題の発端があると考えられる。

これに対して、今回提示するコーチング・プロセスは、まずチームの目標、方向性、取り組み方である

「チーム・ビジョン」を作成しそれを周知させる。この「チーム・ビジョン」は、個人個人がチームとして一つになり、目的のために努力するための象徴的存在となる。このプロセスの土台となる部分である。作成の方法は、今回の事例では監督とキャプテン、副キャプテンの三人で「目標」「個人、チームの姿勢」「内的、外的な取り組み」の3点に即した意見を出し合い、それをまとめた。この方法に限らず、「チーム・ビジョン」を作成することは可能であり、より多くの選手の意見を出し合って、また時には学校の方針や第三者の意見も取り入れながら作成することも有意義であろう。チームは常にこのビジョンに即して計画され、改善され、進歩していくことを求められなければならない。次に、「チーム・ビジョン」を踏まえ尚且つ、競技特性を把握した上で「チームの定義」を提示する。これは、上記で提起した問題の発端を打破する重要なポジションを担っている。団体スポーツでは専門性が求められる様々なポジションがある。また、選手として実際の試合に出場する選手数は、通常、登録人数よりも少数であるのがほとんどである。またチーム目標が高ければ高いほど、特定の選手が占める出場機会が増大する。そのため、その他多くの選手は出場機会を得られない場合が多い。また学生運動部では、選手が補助的な役割を担わなければ組織は円滑に運営されないため、選手として以外の役割も担わなければならない。競技特性、チーム規模、チーム目標などを考慮した上で、様々な個人的役割を考案することが必要である。ただその中で、選手に強調して周知しなければならないのは、その役割は「チーム・ビジョン」に即した形で指導者によって選別され、その一つ一つがチームにとって欠かせない存在であり、尚且つそこに部員としての優劣関係は存在しないということである。事例の「チームの定義」でもあった通り「互いに補完しあう」存在でなければならず、これを認識させることによって、問題の発端に対する免疫力は向上するものと考えられる。つまりは、個人の必要性が増大し、個人の存在が「犠牲となる個人」ではなく「役割を担う存在としての個人」として認識されることである。そして最後に、指導者が個人の競技力(技量、性格、特性等)を考慮した上で「個人の役割」を明確にする。これまでの二つのプロセスを経たことにより、「役割を担う存在としての個人」がチームのために行動し、チーム目標に向かって努力してくれることとなる。

第一段階 「チーム・ビジョン」の作成と周知

第二段階 「チーム・ビジョン」と競技特性に基づいた「チームの定義」の作成と周知

第三段階 個人の競技力を考慮した「個人の役割」の提示

以上の三段階のプロセスが、「役割を担う存在としての個人」を明確にするコーチング・プロセスであり、団体スポーツにおける個人を活かしたチーム・マネジメントである。

## VI. まとめと今後の課題

本研究は、C大学女子ソフトボール部を対象として「役割を担う存在としての個人」を明確にするコーチング・プロセスと、その実践的効果を検証することを目的とした。そのプロセスの最終段階である、「個人の役割」を規定することによって、得られた効果は以下の4点であった。

1. 時間と環境の有効利用
2. 役割を与えられた選手の競技力向上
3. 試合前の効果的、効率的な準備
4. チームの統制力の向上

以上 4 点は「個人の役割」を規定するまでのコーチング・プロセスを経たことによって、「犠牲となる個人」から「役割を担う存在としての個人」へと認識が変容した影響を受けポジティブな捉え方をされた結果である。

第一段階 「チーム・ビジョン」の作成と周知

第二段階 「チーム・ビジョン」と競技特性に基づいた「チームの定義」の作成と周知

第三段階 個人の競技力を考慮した「個人の役割」の提示

「制限される存在の個人」のチームにおける必要性の認識は高まり、周りの選手の形式的平等への固執は減少する。今回取り上げたこの事例は、従来言われてきた我が国の学校運動部の性格である個人を犠牲にする精神性ではなく、「チーム・ビジョン」を立案し、「チームを定義」し、個人の競技力を考慮して「個人の役割」を明確にする個人を活かしたチーム・マネジメントである。特に団体スポーツに対して、汎用性の高い研究であると考えられる。

結果的に、この対象となったチームは、目標であった全国大会優勝を果たすことはできなかったが、上位(ベスト8)に進出することはできた。また前記した効果を受けて、個人がチームのために役割を果たそうと取り組み、チーム・ビジョンを意識した言動や姿勢が見受けられた。またそれに伴って、問題提起で挙げた選手、監督間の軋轢は存在しなかった。

今回対象となったチームは、大学生の女子種目、ソフトボール競技であり、30 名程度のチームで、またそのレベルは全国大会で優勝を目標とするチームであった。そのため、同じ学生スポーツである高校生以下、また男性種目、他競技での実践的研究の必要性が求められる。さらに端的な調査であることも否めない。今後の課題としては、さまざまな年齢、性別、競技に援用され、また長期的に実践されていくことが挙げられる。

#### <参考文献>

- 1) 江刺正吾, 小椋博編(1994)高校野球の社会学 甲子園を読む. 世界思想社.
- 2) 岩崎夏海(2009)もしも高校野球のマネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら. ダイヤモンド社.
- 3) 北森義明(1978)巨人軍研究 勝つための組織づくり. PHP研究所.
- 4) 岸野雄三(1968)日本のスポーツと日本人のスポーツ観. 体育の科学, 18-1:12-15.
- 5) 西田保(2010)チャレンジ精神と挫折感. 体育の科学 60.
- 6) 大橋美勝, 徳永敏文(1982)日本人のスポーツ観について—多様性とその変化—. 体育・スポーツ社会学研究 1 体育・スポーツ社会学研究会編. 道和書院.
- 7) P.F.ドラッカー(2001)マネジメント 基本と原則. ダイヤモンド社.
- 8) 城丸章夫(1992)城丸章夫著作集【第5巻】集団主義と教科外活動. 榊青木書店.
- 9) 上杉正幸(1982)日本人のスポーツ価値観と道・修行の思想. 体育・スポーツ社会学研究 1 体育・スポーツ社会学研究会編. 道和書院.